送別の辞

遠田晤良教授の退職にあたって

木村英明

日本語・日本文化学科の遠田晤良教授は、二〇〇六年三月末日をもって定年により退職された。それよりひと足早い三月四日、「光源氏の晩年」と題して先生による記念講義が行われ、学恩を受けた在学生や卒業生、市民サークル「源氏の会」有志、大学の同僚など大勢が集い、耳を傾けた。卒業生の呼びかけで企画されたものであるが、終了後に心暖まる慰労の会も催され、最後を締めくくるにふさわしい先生ならではの講義・慰労会であった。

先生は、一九七六年一〇月に札幌大学へ赴任されている。当初は女子短期大学部国文科に所属し、一九九七年四月短期大学の一部転換改組と文化学部の開設にともない文化学部日本語・日本文化学科に転属している。都合二九年間、文化学部のみならず、大学の発展に多大なる貢献を果たしてきたことは、先生の略歴を一瞥するだけでも容易に理解していただけるに違いない。

大きな柱が抜けて、あらためて時代の移り変わりを実感しているところであるが、ここではこれまでの先生の功

績を簡単に紹介しつつ、感謝の意を表すこととしたい。

先に札幌大学での在職期間二九年と紹介したが、先生は、請われて本学に着任するまでの期間も一貫して教育現場に身を置かれている。一九五八年三月に北海道大学文学部文学研究科国文学専攻を卒業した後、希望学園第一高等学校に教諭として勤務し、北海道立岩見沢西高等学校、札幌開成高等学校、国立苫小牧工業専門学校を歴任、その後本学に着任している。まさに教職一筋の半生で、四八年間の長きに及ぶ。それ故、ことのほか教育に熱心で、先生の情熱は退職するまで一貫して衰えることはなかった。温厚篤実、天賦の才とも言うべき人柄が手伝って、学生たちからの信頼は厚く、先生の研究室から学生や卒業生の賑わいが絶えたことは一度とない。

また、和光同塵、決して偉ぶることなく、常に学生の目線で応対する姿勢に先生の教育の真髄があった。文化学部以前の短大時代の話になるが、学生は卒業論文が必修とされていた。当然ながら先生の演習に人気が集中し、しかも学生に短大生活わずか二年（実質的にはそのうちの一年間）で書き上げさせるという過酷な条件下に置かれていた。にもかかわらず、演習参加者は、特別なケースを除いてひとりの落伍者もなくレベルの高い卒業論文を書き上げていた。先生の懇切丁寧な指導の結果によるが、それら卒業論文は、毎年一冊に綴じられ、研究室の書架を飾っていた。卒業論文の取り扱いこそ異なるが、文化学部に移ってからもその熱心な指導は変わることなく続けられていた。学校教育での時雨の化を目の当たりにし、大いに啓発されたのは私ひとりではなかろう。

学園紛争の後遺症が依然として残る一九八〇年代初期、先生は、学生部長に選出されている（現在は学長の任命）。学校当局？を信用せず、常に対立的な立場を取り続けていた学生自治会執行部に対し部長として交渉にあたり、よ

うやく不正常な関係が清算されたという歴史を知る者は、今や少なかろう。大学権力を笠に着るでもなく、またいたずらに学生に阿るでもなく、忍耐強くことに当たられていたのが印象的である。また近年、留学生の滞在や就労をめぐり、マスコミなどで取り上げられ社会問題化する機会が多いが、マスコミなどによる留学生や大学への必要以上の誹謗中傷、そして右往左往する大学執行部の弱腰を批判し、留学生の擁護を訴え続けていたこともよく知られている。それもこれも、学生の立場に立った弱者擁護の姿勢に貫かれていることがよく理解できよう。

先生の札幌大学在職中、数多くの学生を世に送り出しているが、とりわけ教員の養成に力を注いできたことは特筆すべきことであろう。教育に情熱を注ぐ未来の後継者たちの育成である。このことに関わってこれまた関係者が少なくなって忘れられがちなことがらであるが、どうしてもあげておかなければならない先生の功績がある。

北海道教育委員会教職員課の要請に基づき札幌大学で実施された「免許法認定講習（国語課程）」の講師を、一九年間にわたって勤められたことである。受講者は現職の中学校教員で、それぞれが有する免許に加えてあらたに国語科の免許が取得できるようにと設けられた認定講習であるが、毎年夏休み二週間と冬休み一〇日間、三年間の繰り返し受講をもって資格認定される制度である。先生は、ほぼ六サイクル、本制度が打ち切られる一九九七年まで休むことなく講師を引き受けられている。

この頃、自身の教え子を含めて短大国文科卒業生が数多く中学校教員に採用されているが、貴重な休暇を削ってまで任にあたり続けた遠田先生の熱意を北海道教育委員会の関係者が高く評価していたからに他ならない。なお、新設学部ながら文化学部の卒業生にあって、すでに教育現場に立っている者は十指に余る。いかなる公務や雑務？があろうと、学生と教育のためには労を厭わない先生の真骨頂が発揮された好例である。

さて、ここで遠田先生の研究活動について触れることにしたい。考古学を専門とする私が、国文学研究の世界にまで足を踏み込み、先生の業績を正しく評するのは難しい。幸いなことに、私は先生の八歳年下にもかかわらず、先生が札幌大学に着任して以来ことのほか親しくしていただき、折々に先生の友人や知人を紹介していただいた。ここでは、見聞きした話なども参考にしながらいくらかなりともその責を果たしたい。

先に紹介したように、遠田先生は北海道大学文学部を卒業し、ただちに高校教諭の道に進んでいるが、戦後の混乱がなお治まらない時代、好きな国文学の研究を継続するもっとも確かな道が教職に身を置くことであったことは容易に推察される。それ故、研究を捨てることもなく続けてこられ、やがてその実績が認められ本学に迎えられている。

国文学研究者としては、当然のことながら和歌研究と日記文学研究の二筋の道を歩いてきたように理解されるが、特に、「建礼門院右京大夫集」についての歌人研究と作品の分析を長い間研究対象とし、力を注いでこられた。この歌集は、源平争乱の時代を生きた女性の歌集であるが、戦時中、学徒兵として戦場に赴いた学生たちの愛読書であったことが興味を抱くきっかけであったと、先生から伺った。すなわち、戦中戦後の混乱期に少年時代を過ごした経験が、時代の変革期を生きた人間に強い興味と関心を抱かせたというのである。ちなみに、遠田先生と私の関係で言うと、正否の見極めや価値判断に性急な私に対し、その弱点を窘めるように指摘するのが先生の役回りであったが、古い価値が打ち壊され、新しい価値は未だ見えずという過渡期を生きる人間の姿に強い関心を持ち、研究を深めていた先生ならではの指摘で、私にとっては常に重いものであった。

右京大夫の後半生を明らかにする伝記的事実の発掘という先生の研究は、今や学界の定説となるなど、右京大夫

集研究の先駆的役割が学会で高い評価を得ている。そしてこの歌集は、個人歌集、つまり家集であると同時に日記文学としての性格を持っており、その研究にあたっては、和歌史に対する研究と同時に、日記文学作品や源氏物語への省察が必須とされる。和歌研究から、更級日記、紫式部日記など、日記文学研究へと関心を広げていかれた研究の展開は極めて自然の成り行きであり、表現をめぐる考察と人間心理の洞察から、鋭く問題を提起してきた、と広く評されている。

また、和歌研究での翻刻など地道な基礎研究の上に、膨大な「新編国歌大観」「私家集大成」「和歌大辞典」などの編集作業における地味な下働きも逸することのできない和歌文学会への大きな貢献と評価されている。先生の個人的関心は、本来勅撰集になるべく編纂されながら不運な道をたどった「続詞花集」の基礎的研究や、右京大夫を世に出した藤原定家の和歌にあって、千載集・新古今集成立に関する和歌史の研究に一石を投じてきた。

学界ではいっそうの研究の展開、さらには「遠田学」とでも言えるような研究の集大成が期待されていたにもかかわらず、秘めて外にあらわさない碩学の遠田先生からすると、充分に多作であったとは言えない。遺り残しの課題もあったように推察できる。しかしながら、少しばかり惜しまれる思いもあるが、大学への貢献度を考慮すると、その功績は余りあるものがある。

遠田先生は、教職員組合、大学行政、そして大学経営の分野においても大きな足跡を残されている。定年制施行（看板教授の実質的「解雇」）、賃金カット、教員の流失、学生の定員割れ、さらには関連グループ会社の株仕手戦失敗にかかわる初代理事長の引責辞任などの問題が相次いで発生し、札幌大学は設立まもなくから大揺れに揺れ動

き続けた。先生は、そのような混乱期に着任している。先生が教職員組合の組合員から信望を集めるのにはそれほど多くの時間を要せず、ほどなく執行委員長に選ばれている。そして、その委員長の下で、終日のストライキが整然と闘い抜かれた。組合運動史にはもちろん、大学の歴史にも記録されるストライキで、今でも迸る鮮烈な感動が記憶に残っている。蛇足ながら、このストライキが組合の勝利に終わったことは言うまでもない。

その後しばらくして、教員の経営参加を打ち出し、全学一致体制の確立を図るべく事態の収拾役に奔走したのが、元明治大学総長の武田孟学長（第五代・故人）である。その武田先生が、教職員からの信望が厚い遠田先生に経営参加を要請したのも当然の成り行きであった。一九八二年三月学校法人札幌大学の理事・評議員に就任した先生は、組合とはまったく異なる仕事の領域、時に対立や矛盾を孕んだ職域にもかかわらず、多くの課題を見事に調和・統合させつつ解決し、経営陣のひとりとして大学再建を軌道に乗せた。特に、学生や教員に直接かかわる教育環境の整備に力を注がれた。もちろん、組合の利益を尊重しつつ経営の改善が図られた。その手腕、とりわけ秀でたバランス感覚は、多くの教職員が一致して認めるところである。一時理事職を離れるが、一九九五年一一月から再び木村真佐幸学長、そして山口昌男学長に請われ同様の要職につかれている。両学長が、違った意味で強い個性の持ち主であったことは周知の事実であるが、曲り形にも両学長が任期をまっとうしえたのも、遠田先生の下支えがあったからである。この間に発せられた多くの書類が先生の下書きになるものであることこそ、その何よりの証しであろう。

温厚で、清濁をも併呑できる自由・寛容な性格とは一見裏腹な関係にも思える確信に満ちた行動原理について、先生自身が口にすることはあまりない。しかし、教員としてのそもそもの良心、そして「学問の府」に身を置く者

の良識にしっかりと裏打ちされたものであることは疑いない。

愚痴と陰口、責任転嫁を潔しとしないところが先生と私の共通する性格のひとつであるが、珍しく、大学に転職せずかつての教員生活を続けていたらもっと良い人生があったように思う、としみじみと述懐された先生を記憶している。難しい局面に立たされ続けていた先生の胸中を垣間見る思いであった。最近、同僚（金沢先生）の新たな教育的挑戦のおかげでかつて特別な興味を抱いていた人物を久し振りに思い出している。日本の民俗学やアイヌ文化研究に造詣が深いロシア人のニコライ・ネフスキーである。サンクト・ペテルブルグの工芸専門学校を卒業し、列車の機関士を目指していたものの、それを断念し、日本の民俗学研究に傾注したがためにロシア革命後のスターリン時代に夫人の萬谷イソ（積丹町生れ）とともにスパイ容疑で粛清され、牢死するという数奇な運命を辿った人物である。彼が学んだ東洋学研究所は私の留学先の物質文化史研究所（エルミターシュ美術館の隣）と同じ建物の中にあり、ネフスキーを研究する友人がいたこともあって興味を抱くようになったのであるが、加藤九祚さん（前国立民族学博物館教授）が自身の著書（『天の蛇』）の中で彼を紹介しつつ、「明らかなことは、人生はそれぞれ出なおしのきかない一本道」と評していたことを思い出した。

遠田先生、お疲れ様。結局は、先生にこそ相応しい道だったように思う。

遠田先生は、樺太庁大泊町に生まれ、終戦後ひと時山形県余目町で過ごすこともあったが、札幌に移住し、少年期、青年期を送っている。札幌のおよそ中央で生まれた私の学区や生活圏が先生のそれとほとんど重なり、体験の記憶や人脈の多くを共有できたこと、そして大陸原風景への憧憬も手伝って、誰よりも親しくしていただいたよう

に思う。

酒好きのふたり、共にした酒席も数え切れない。決して酒に溺れることもなく、国文学者とは思えない舌を巻く博覧強記、当意即妙のユーモアなどが人の心を捉えて離さない。

先生は、愛用のライカを手にしてのカメラワーク、そして木版画の制作はプロ級、美術館巡りを特別の趣味とされている。多趣多芸の先生、これまでの疲れを癒してスローライフの生活をお楽しみ下さい。